

挽
歌

江
崎
睦
子

投稿をなして直後に逝きましし母の歌載
る歌人クラブ誌

妻喪失の痛恨は口にいだされずひたすら
食の細りたる父

夜半に寝覚め母さんは元気かと問いし父給う
夢と現の間にいまして

強面こわしての明治男のもろくして一年半にて妻
に従き逝く

亡き母の姿顕ちこよ朧月夜その仄白き花
影のもと

幼我に産土の杜の落ち椿糸に通してかけ
くれし母

大阪の訛はそのまま六十年住みつきて岐
阜の土となりし父母

発刊を亡父が待ちいし塩野七生の「ロー
マ誌・第二卷」書店に並ぶ

古書店の「西垣書房」は店を閉じ大正・
昭和も遠くなりしか

十二月八日は何の日と問えば若きらはジヨ
ン・レノンの命日かと応う

革ジャンに冬野の匂いたたしめて脚長き
少年ら屯する街

野を駆けるけものの昏き眸をもつや少年
はジャンパーの衿立てて佇つ

裸木に幾万燭光電飾の星をまとわせ街は
眠らず

じよう舌にさんざめく人工の星々を見降
ろして冬の星座はめぐる

イブの街の喧騒の流れに身を置きて漂流
者のごとき我かと思う

銀紙の星ひとつ舗道より拾い上ぐ喪いし
こと多かりし年の瀬に

不信きぎす貧しき心の手にとればメルヘ
ンの星も汚れていたり

枯芝の間にクロッカスの花開きそこより
春の気配漂う

ミモザ色のアムブレラさしてみたくなり
四月の雨の街に出てゆく

四季の国に住む哀しさはめぐりきて母の
忌に咲く藤の花房